

## 展望のある関係・ない関係

### —関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR) の作成—

園 田 直 子<sup>1)</sup>

片 岡 祥<sup>2)</sup>

#### 要 約

本研究は、白井 (1994) の作成した「時間的展望体験尺度」を元に、個人の時間的展望ではなく、親密な関係についての時間的展望を測定する尺度を作成することを目的とするものである。「時間的展望体験尺度」は、過去は「受容」、現在は「充実」、未来は「希望」と「目標指向性」から構成されており、20項目から成る。これらの項目を参考に「恋愛中の二人の関係」についての時間的展望を尋ねる項目を作成したところ、過去は「乖離」、現在は「倦怠」「充実」、未来は「目標」「希望」の5因子が抽出された。

同時的妥当性に関しては恋愛関係に関する他の4つの尺度、及び時間的展望と関連があると思われる自我同一性に関する1つの尺度との相関を確かめたところ、妥当な相関が得られた。また、判別的妥当性に関してはアタッチメントスタイルと因子得点の差の分析より、アタッチメントスタイルによって時間的展望が異なることが示された。これらの結果より、ETPS-CRの因子構造と妥当性が確認された。

キーワード：親密な関係 時間的展望 自我同一性 アタッチメントスタイル

#### 問題と目的

本研究は青年期における発達上の重要な課題である自我同一性の確立 (エリクソン1950) に深くかかわっている「時間的展望」と「他者との親密な関係」というふたつの観点を結びつけ、恋愛関係における時間的展望尺度を作成することを目的としている。

ハヴィガースト (1943) は、青年期の具体的な心理的・社会的な文脈での発達課題のひとつとして「性役割の獲得」「自分の身体的変化を受け入れること」「同性・異性の友人との新しい、成熟した人間関係をもつこと」、という一連の恋愛関係に関する課題をあげて

いる。青年期において、他者との性的関心を伴う関係を築き、維持し、発展させていくことは重要な課題であり、また親子関係における依存状態から心理的に独立していくためにも重要な契機になる。

青年期の恋愛と心理的独立については片岡 (2008) が、アタッチメントの観点から論じている。片岡は青年期の恋愛は、養育者である親とのアタッチメント関係から、対等で相互的な関係である友人関係を経て、より親密で将来的に永続する可能性のある恋愛関係というアダルト・アタッチメントに移行することによって、精神的な独立を果たす役割をもっていると論じている。

1) 久留米大学文学部

2) 久留米大学大学院心理学研究科修士課程

青年期のもうひとつの重要な課題は、時間的展望の獲得である(都筑1999, 2007, 白井1997)。青年期は「自分はどのような人間であるか」という自分を独自の人間として統合したイメージを確立する時期である。また、そのイメージは一貫性と同一性を備えたものでなければならない。同一性を獲得するためには、他者とのつながりの感覚や、過去と現在を通じての自己の同一性の感覚が必要である。また青年期は将来の職業や家庭生活のための準備期間でもあるが、そのような意味でも過去と現在だけでなく、未来についての見通しをたて、具体的な目標もつことが求められる。しかしながら、過去と現在を統合し、未来についての見通しを持つことはそれほど簡単なことではなく、しばしば「役割の混乱」「同一性の拡散」「モラトリアム」「アパシー」等の状態に陥ることが指摘されている。これらの状態は、主観的には悩みや苦悶として体験されるが、必ずしも不適応とはいえず、同一性の獲得のためには乗り越えなければならない危機であるともいえる(Marcia, 1966)。

青年期の時間的展望を問題にする場合、将来の職業選択との関連が主に論じられるが、エリクソンも指摘するように、異性との関係を形成することはこの時期の重要な課題でありながら、恋愛における時間的展望という観点からの研究はほとんどない。しかし青年期は、自己の確立という課題にとりくみながら、同時に定位家族から出て将来の生殖家族を形成する準備段階として、その家庭を協同して形成する相手候補としての恋愛パートナーとの新たな関係の構築という課題にも直面する時期であるといえよう。実際、青年の大きな関心のひとつは、いかに恋愛パートナーを獲得し、良好な関係を持つかということである。また良好な関係を持つことは短期的な関係にとどまらず、できればその関係を長期にわたって維持し、より安定的な関係に発展させるかということを考えるようになる。

発達的に見ると、青年期前期には実際に交際することよりも、自分の恋愛感情を投げかける相手を見つけることに重点がおかれ、手の届かない対象に恋愛感情を投影したり、単に恋愛感情を「告白」して認めてもらい現在の感情を満足させる、という刹那的な恋愛行動がみられる。しかし、青年期中期になると次第に交際そのものを楽しみ、二人でさまざまな経験をする中で自己と他者を発見するようになる。青年期の終わりに至ると恋愛関係を将来にもつなげる関係としての見通しを持ち、展望を伴った位置づけをするようになるのではないかと思われる。本研究は、このような恋愛

関係における過去、現在、未来についての展望を測定する尺度を作成することを目的としている。

個人の時間的展望体験尺度については、白井(1994)が「時間的展望体験尺度(Experimental Time Perspective Scale)」を作成している。この尺度は、過去に関しては「受容」、現在に関しては「充実感」、未来に関しては「目標指向性」「希望」の4因子から構成されており、20項目から成っている。本研究では、この20項目にもとづいて、恋愛関係における「過去」「現在」「未来」についての質問項目を作成した。具体的には、「私」という主語を「二人」「私たち」または「私の恋愛」に置き換え、探索的因子分析を行い、尺度を作成した。

このようにして作成した尺度の妥当性を検討するため、同時的妥当性の検討として種々の恋愛尺度との関連、自我同一性尺度との関連を検討する。さらに、判別的妥当性を検討するため、アタッチメントスタイルによって恋愛における時間的展望がどのように異なるかもあわせて検討する。

## 方 法

### 手続き及び使用した尺度

(1) 因子の抽出「時間的展望体験尺度」を改訂した「(恋愛)関係における時間的展望体験尺度」20項目(6件法)について探索的因子分析を行い、因子を抽出した。(2) さらに、同時的妥当性を検討するために、恋愛に関する4つの尺度との相関および自我同一性に関する尺度との相関を求めた。

恋愛関係に関する尺度は次の4種類である。

①PRASS (Process of Adult Attachment Status Scale)：片岡・園田(2007)を使用した。これはアダルトアタッチメント理論からみた恋愛関係の形成状態における代表的な特徴を測定するもので、「安心基地」12項目、「分離不安」13項目、「身体的接触」6項目、「個別性」5項目の計36項目で構成され、7件法を用いて実施された。

なお、片岡・園田(2007)によると、PRASSはステップワイズ式探索的因子分析により選択された各因子3項目を用いた確認型因子分析の結果、因子的妥当性が確認されているので、本分析では因子的妥当性の確認された各因子3項目の計12項目を用いた。

②恋人版 ECR (the Experiences in Close Relationships inventory)：中尾・加藤(2004)を使用した。個人の恋愛関係における一般的な自己や他者への内的作業モデルを測定する尺度であるとされ、2つの下位

尺度「親密性の回避（ネガティブな他者観）」と「見捨てられ不安・関係不安（ネガティブな自己観）」から構成されている。本尺度の項目数は計26項目であったが、参加者の負担を考え、因子付加量の高い項目から5項目ずつ計10項目を選んで7件法を用いて実施した。

③TLS (Triangular Love Scale)：金政・大坊(2003)を使用した。恋愛関係の3要素を測定する尺度で「親密性」、「情熱」、「コミットメント」の3つの下位尺度から構成されている。本尺度の項目数は計27項目であったが、参加者の負担を考え、因子付加量の高い項目から5項目ずつ計15項目を選んで7件法を用いて実施した。

④LETS-2 (Lee's Love Type Scale 2nd version)：松井ら(1990)。恋愛のタイプを測定する尺度で、「エロス」、「ルダス」、「マニア」、「ストルゲ」、「アガペ」、「プラグマ」の6つの下位尺度からなる。本尺度は特定の他者に対する恋愛態度をたずねる項目と一般的な恋愛態度をたずねる項目から構成されているが、本研究では、関係における時間的展望体験尺度の妥当性を確かめるために、この尺度との相関をみることを目的として使用するため、一般的な恋愛態度をたずねる項目を全て除外した。「プラグマ」を測定する項目は全て一般的な恋愛態度をたずねる項目に含まれるため、実施にあたっては「プラグマ」を除いた5つの下位尺度を用いた。本尺度の特定の他者に対する恋愛態度をたずねる項目は42項目であったが、参加者の負担を考え、因子付加量の高い項目から5項目ずつ計25項目を選んで7件法を用いて実施した。

#### 自我同一性に関する尺度

多次元自我同一性尺度 (MEIS (Multidimensional Ego Identity Scale, 谷, 2001)) を使用した。MEISは、自我同一性の第V段階における同一性を測定するものであるとされており、「自己斉一性・連続性 (自己の不変性および時間的連続性の感覚)」、「対自的同一性 (自分が望んでいることが明確であるという感覚)」、「対他的同一性 (他者から理解されているという感覚)」、「心理社会的同一性 (自分らしく生きているという感覚)」の4つの因子からなる下位概念から構成されている。各因子5項目の計20項目7件法を用いて実施した。

(3) アタッチメントスタイルと尺度の関連の検討。

ECRの結果にもとづいて、被験者を4つのアタッチメントスタイル (AS) に分類した。ネガティブな他者観、ネガティブな自己観の得点の高低の組み合わせ

で低低 (安定型)、高低 (とらわれ型)、低高 (拒絶型)、高高 (恐れ型) の4つの型に分け、ASによって尺度得点がどのように異なるかを比較した。

#### 被験者

調査は福岡県内の大学生156名 (男子32名、女子124名) に対して、作成した恋愛関係における時間的展望体験尺度と上述した尺度からなる質問紙を講義時間に配布し、集団的に実施した。調査時期は2007年8月であった。ただし、尺度によっては実施人数が異なっているため、それぞれの有効回答者のみを分析の対象とした。

### 結果と考察

#### 1. 探索的因子分析による因子の抽出

「(恋愛) 関係における時間的展望体験尺度」20項目について最少二乗解、バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の変化と解釈可能性を考慮した結果、5因子が抽出された。第1因子には、「私たちにほだしたいの将来計画がある」や「2人の将来のためを考えて今から準備していることがある」などの項目が集まったことから、「目標」と命名した。第2因子には、「過去の私の恋愛のことはあまり思い出したくない」や「私は過去の恋愛での出来事にこだわっている」などの項目が集まったことから、「乖離」と命名した。第3因子には、「恋人との毎日はなんとなく過ぎていく」や「2人の毎日は同じことの繰り返しで退屈だ」などの項目が集まったことから、「倦怠」と命名した。第4因子には、「私の恋愛の将来には希望がもてる」や「自分の恋愛の将来は自分できりひらく自信がある」などの項目が集まったことから、「希望」と命名した。第5因子には、「私たちの今の生活に満足している」や「2人の毎日の生活は充実している」などの項目が集まったことから、「充実」と命名した (表1)。

内的整合性を求めるために各因子ごとに $\alpha$ 係数を求めたところ、「目標」： $\alpha = .815$ 、「乖離」： $\alpha = .749$ 、「倦怠」： $\alpha = .724$ 、「希望」： $\alpha = .602$ 、「充実」： $\alpha = .840$ と、「希望」に関しては $\alpha$ 係数がやや低いものの、その他の因子においてはいずれも高い内的整合性が認められた。

項目の内容から、過去については「乖離」、現在については「充実」と「倦怠」、将来については「目標」と「希望」となり、この尺度の下敷きとなった白井(1994)の時間的展望体験尺度との対応で考えると、

表1 Varimax 回転後の因子パターン N=72

	目標	乖離	倦怠	希望	充実	共通性
x6 私たちにはだいたいの将来計画がある	0.86	0.05	0.00	0.08	0.19	0.782
x7 私たちには将来の目標がある	0.71	0.19	0.09	0.12	0.16	0.588
x9 2人の将来のために考えて今から準備していることがある	0.60	0.27	-0.08	0.28	-0.10	0.531
x8 私たちの将来は漠然としていてつかみどころがない(逆転)	-0.59	0.19	0.30	0.03	0.03	0.478
x11 過去の私の恋愛のことはあまり思い出したくない	0.13	0.81	0.02	-0.05	-0.04	0.680
x12 私の過去の恋愛はつらいことばかりだった	0.00	0.65	0.08	0.20	0.08	0.477
x13 私は過去の恋愛での出来事にこだわっている	0.07	0.54	0.08	-0.12	-0.31	0.407
x20 私の過去の恋愛はいつのまにか終わった	0.00	0.50	0.11	-0.09	0.41	0.437
x19 過去の恋愛のことは忘れてしまった	0.06	0.49	0.05	0.00	0.32	0.346
x4 恋人との毎日はなんとなく過ぎていく	-0.06	-0.11	0.75	-0.01	0.22	0.620
x2 2人の毎日は同じことの繰り返しで退屈だ	-0.01	0.05	0.72	0.10	-0.20	0.573
x10 10年後、私たちはどうなっているかよくわからない	-0.49	0.06	0.58	0.02	-0.12	0.592
x5 恋人といるときの自分は本当の自分でないような気がする	-0.04	0.26	0.54	-0.13	-0.22	0.425
x18 将来の恋愛のことはあまり考えたくない	0.03	0.41	0.47	-0.05	-0.09	0.405
x17 私の恋愛の将来には希望がもてる	0.27	0.06	-0.12	0.75	0.17	0.688
x14 私は自分の過去の恋愛を受け入れることができる	-0.14	-0.04	0.11	0.68	-0.07	0.508
x16 自分の恋愛の将来は自分できりひらく自信がある	0.24	0.02	-0.01	0.48	0.12	0.303
x15 私の恋愛には未来がないような気がする(逆転)	-0.09	0.28	0.39	-0.40	-0.17	0.429
x3 私たちの今の生活に満足している	0.06	-0.04	-0.11	0.07	0.65	0.445
x1 2人の毎日の生活は充実している	0.22	0.10	-0.18	0.18	0.49	0.364
説明分散	2.44	2.36	2.28	1.67	1.34	10.08
説明率	12.2	11.8	11.4	8.3	6.7	50.4

ほぼ同じような因子が見出されたといえる。ただし、現在が「倦怠」と「充実」の二つの因子に分かれたところが異なっている。因子ごとの得点の平均は、7点満点中、「目標」4.02、「乖離」3.21、「倦怠」3.56、「希望」4.81、「充実」4.98であった。

## 2. 内部相関の検討

表2に、抽出された5つの因子の内部相関を示す。これによると、過去の「乖離」はいずれの因子とも相関がなかった。現在の「倦怠」と「充実」は負の相関があった。さらに現在の「倦怠」は未来の「目標」「希望」と負の相関があったが、「充実」は未来のいずれの因子とも無相関であった。これは、白井(1994)

表2 抽出された5因子間の内部相関

	目標	乖離	倦怠	希望	充実
目標	1.00				
非受容	-0.03	1.00			
倦怠	-0.52**	0.07	1.00		
希望	0.23*	-0.12	-0.39**	1.00	
充実	0.18	-0.15	-0.46**	0.14	1.00

N=72、 \*\*=.274&lt;.01 \*=.195&lt;.05

の時間的展望体験尺度において、現在の「充実感」が未来の「目標指向性」「希望」のいずれとも相関があったのと異なる結果となった。恋愛関係における現在の倦怠はよくない未来の見通しと相関しているが、現在が充実していることは必ずしもよい将来の見通しと結びつかないことがわかった。また、過去は現在、未来のいずれとも相関がなく、過去の恋愛関係と現在の恋愛関係は独立したものであるといえる。

恋愛関係において、未来を見通すためには、過去の受容や現在の充実以外の要因が必要であることが示唆される。恋愛は他者との関係であるため、自分ひとりではなく相手の特性や相手との関係についての認知、すなわち愛着関係についての内的作業モデルが恋愛の見通しに影響を及ぼしていると考えられる。内的作業モデルを反映するものとしてのアタッチメントスタイルと展望の関係については分析3で示す。

### 3. 同時的妥当性の検討：尺度間の相関

各尺度の平均値は、いずれも7点満点中、PRASSにおいては「身体的接触」5.28、「安心基地」5.16、「分離不安」5.19、「個別性」5.19であった。ECRにおいては「回避」2.78、「不安」4.19であった。TLSにおいては「親密性」5.05、「情熱」4.84、「コミットメント」4.76であった。LETSにおいて「エロス」4.24、「ルダス」3.01、「マニア」4.09、「ストルゲ」3.87、「アガベ」4.22であった。MEISにおいては「自己斉一性・連続性」4.45、「対自的同一性」4.41、「対他的一同性」3.97、「心理社会的同一性」4.25であった。

尺度の同時的妥当性を検討するために、抽出された5つの因子と、恋愛に関連する尺度（PRASS, 恋人版 ECR, TLS, LETS-2）のそれぞれの下位尺度との相関、および多次元的自我同一尺度との相関を求めた（表3）。

これによると、「目標」と正の相関が有意であった

のは、PRASSにおける「安心基地」「個別性」、TLSにおける「親密性」「コミットメント」、LETSにおける「エロス」、MEISにおける「対自的同一性」であった。また、負の相関が有意であったのは ECR における「親密性回避」と LETS の「ルダス」であった。恋愛関係において、目標が持てる人ほど「安心基地」「個別性」「親密性」「コミットメント」「対自的同一性」が高く、逆に「親密性回避」「ルダス（遊びの愛）」が低いといえる。

同様に見ていくと、「乖離」との相関から、自分の過去の恋愛を受容してない人ほど ECR における「親密性回避」が高く、同時に TLS における「親密性」が低い。また、「心理社会的同一性」も低いことがわかる。過去の受容は、他者との親密性を求めることと関連しているといえる。

「倦怠」は「親密性回避」「ルダス」と正の相関があった。また負の相関が多く見られたことから、倦怠得点が高いほど「身体的接触」「安心基地」「個別性」「親密性」「情熱」「コミットメント」「エロス」「アガベ」「対自的同一性」が低く、恋愛関係がうまくいっていないことを示している。さらに、「ルダス」と正の相関があったことから、相手と深く関与せずに関係を続けていることがわかる。

「希望」は PRASS の「身体的接触」「安心基地」「個別性」、TLS のすべての下位尺度、「対自的同一性」「心理社会的同一性」と正の相関があった。また「親密性の回避」と負の相関があった。「目標」と異なるところは、目標は「情熱」と相関が有意でなかったのに対し、「希望」は TLS の全ての下位尺度と相関していたことである。目標は具体的・現実的であるのに対し、希望はより情緒的・主観的なものであるためであろう。

「充実」は「身体的接触」「安心基地」「個別性」、TLS のすべての下位尺度、「エロス」「自己斉一性・

表3 尺度間の相関

尺度	下位尺度	ETPS-CR					
		目標	乖離	倦怠	希望	充実	
PRASS	身体的接触	0.14	-0.10	-0.43 **	0.38 **	0.47 **	
	安心基地	0.41 **	-0.18	-0.53 **	0.32 *	0.47 **	
	分離不安	0.09	0.09	-0.15	-0.09	0.13	
	個別性	0.52 **	0.06	-0.56 **	0.34 *	0.32 *	
ECR	親密性回避	-0.43 **	0.30 *	0.56 **	-0.33 *	-0.42 **	
	関係不安	-0.15	0.20	-0.12	-0.04	0.09	
TLS	親密性	0.41 **	-0.32 *	-0.50 **	0.36 **	0.38 **	
	情熱	0.27	0.09	-0.45 **	0.30 *	0.30 *	
	コミットメント	0.56 **	-0.04	-0.60 **	0.37 **	0.53 **	
LETS2	エロス	0.32 *	0.10	-0.41 **	0.14	0.32 *	
	ルダス	-0.40 **	0.02	0.41 **	-0.17	-0.18	
	マニア	0.16	0.26	-0.24	-0.03	0.09	
	ストルゲ	-0.02	0.10	0.00	-0.11	0.06	
	アガペ	0.23	0.17	-0.34 *	0.08	0.23	
MEIS	自己斉一性・連続性	0.00	-0.27	-0.22	0.26	0.33 *	
	対自的同一性	0.33 *	-0.16	-0.32 *	0.30 *	0.24	
	対他的同一性	0.08	-0.21	-0.13	0.20	0.39 **	
	心理社会的同一性	-0.01	-0.29 *	-0.08	0.40 **	0.14	
相関	**=.354<.01						
N=55	*=.273<.05						

連続性 (自己斉一性・連続性は自己の不変性および時間的連続性の感覚)、「対他的同一性」と正の相関があった。また親密性の回避と負の相関があった。「現

在の充実」と他の因子の異なるところは、MEISの下位尺度との相関であった。

4. 判別的妥当性の検討：アタッチメントスタイルによる尺度得点の差異

ECR 尺度における「親密性回避」「関係不安」の平均値を基準に「安定型」(12名)「とらわれ型」(17名)「拒絶型」(12名)「おそれ型」(14名)に被験者を分類した。それぞれのスタイルごとの尺度の各因子の平均

値を図1～5に示した。

図にもとづき、因子ごとに1要因分散分析を行った。結果を表4に示す。これによると、安定型は「目標」「希望」「充実」について、他の型より得点が高く、「倦怠」が低いことが示された。また、とらわれ型は「充実」が高く「倦怠」が低いことから、恋愛の現在展望は良好であるものの、未来の「希望」や「目標」については高くないことがわかる。乖離に関しては差がなかった。

これらの結果より、恋愛関係における時間的展望は、過去についてはアタッチメントスタイル間に差がないが、現在については「安定型」と「とらわれ型」が展望をもっており、将来の見通し(「目標」と「希望」)に関しては、「安定型」が他の型よりも有意に見通しをもっているといえる。このことより ECR で測定される「親密性回避」と「関係不安」の高さは、将来の見通し(目標)を持つこととネガティブな関係があることがわかる。

判別的妥当性に関しては、恋愛関係における時間的

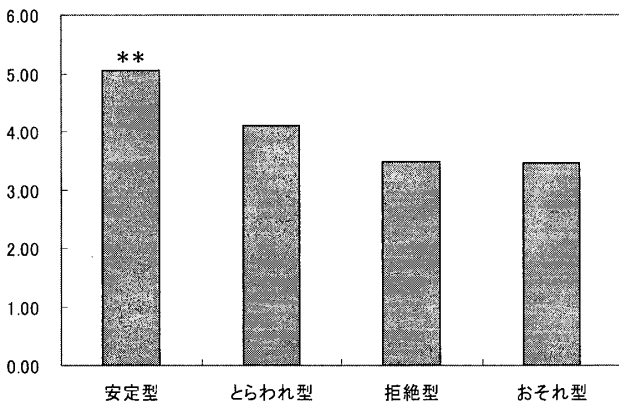


図1 アタッチメントスタイルと目標得点

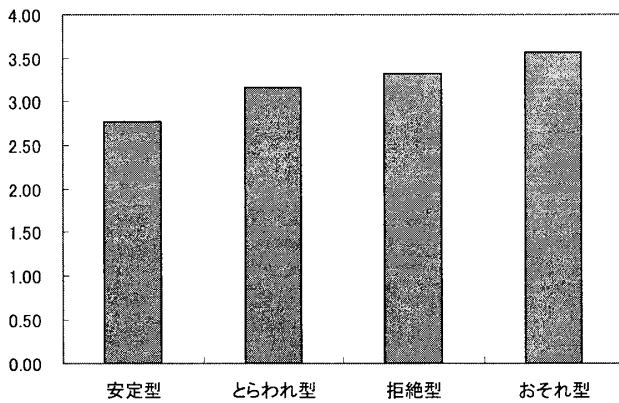


図2 アタッチメントスタイルと乖離得点

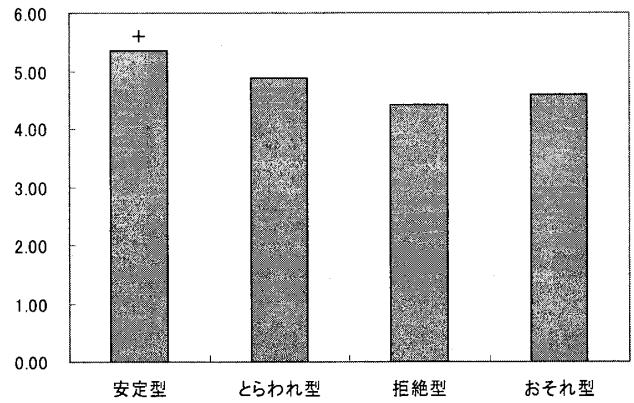


図4 アタッチメントスタイルと希望得点

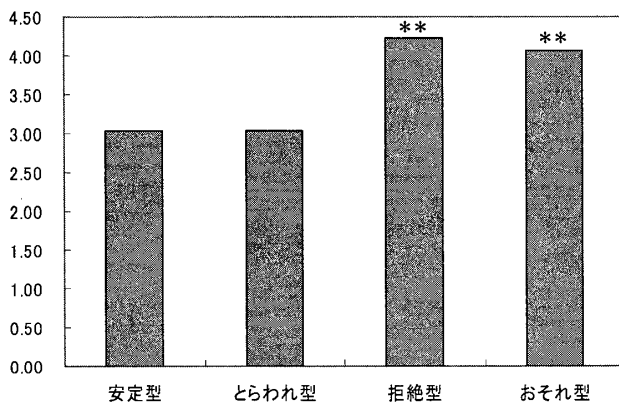


図3 アタッチメントスタイルと倦怠得点

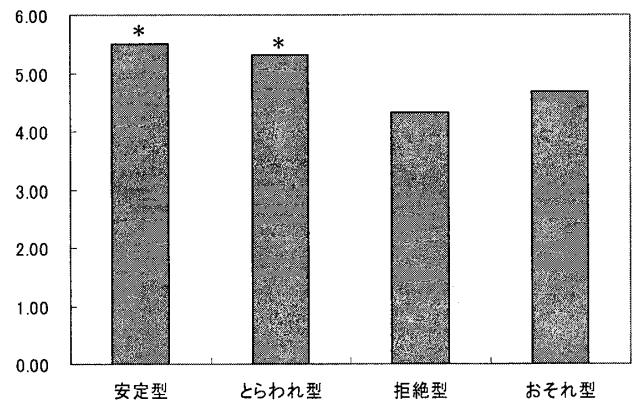


図5 アタッチメントスタイルと充実得点

表4 アタッチメントスタイルによる各因子の平均値の比較

	安定型	とらわれ型	拒絶型	おそれ型	F	LSD
目標	5.06	4.11	3.48	3.46	5.51**	安定>とらわれ=拒絶=おそれ
乖離	2.77	3.17	3.32	3.57	1.31,n.s	
倦怠	3.03	3.04	4.23	4.07	7.71**	拒絶=おそれ>安定=とらわれ
希望	5.35	4.88	4.40	4.61	2.81†	安定>(とらわれ)=拒絶=おそれ
充実	5.50	5.32	4.33	4.68	3.17*	安定=とらわれ=(おそれ)>拒絶

展望体験尺度はアタッチメントスタイルによって異なることがわかった。すなわち、「安定型」「とらわれ型」「拒絶型」「おそれ型」それぞれについて各因子得点の特徴が見られ、4つのアタッチメントスタイルを判別することができた。

### まとめ

恋愛関係における時間的展望尺度は、過去については「乖離」、現在については「倦怠」と「充実」、未来については「希望」と「目標」の5因子から成ることが示された。内部相関より、「過去」は現在と未来とは独立していることがわかった。これは過去の恋愛と現在および未来の恋愛は相手が異なるために、関係が変わるためであると考えられる。しかし過去と他の尺度との相関は一部みられたので、過去の経験は個人のもっている内的作業モデルに影響を与えていると考えられる。また、現在の「倦怠」は未来の希望と目標とネガティブな関係があったが、「充実」は未来と相関がなかった。このことも、恋愛に関する未来の見通しをもつためには現在の充実だけでなく、自己と他者の関係についての内的作業モデルの関与が必要であることをものがたっている。

同時的妥当性の検討からは、本研究で作成したETPS-CRにおいて、現在の恋愛のよしあしにかかわる要素（「身体的接触」「安心基地」「個別性」「親密性回避」「親密性」「エロス」）が見出された。また、未来については「希望」も「目標」も「分離不安」と相関がなかった。さらに希望に関しては相関のあった因子は現在の恋愛のよし悪しとほぼ同じであったが、「目標」は「情熱」と相関がないなど、希望との差異がみられた。またLETS2の「ルダス」は他の恋愛のタイプと異なり、倦怠と正、目標と負の相関があり、現在、未来ともに展望のない関係であることが示され

た。

多元的自我同一性との相関の結果から、過去の乖離は「自分らしく生きていないこと」、現在の倦怠は「自分がなにをしたいかわからないこと」、現在の充実「自分の時間的連続性、他者から理解されている感覚」未来に関しては希望も目標も「自分が何をしたいかが明確であること」、また希望に関しては「自分らしく生きていること」と関係があった。このことより、恋愛関係における過去、現在、未来の展望は自我同一性と関連していることが示された。

判別的妥当性の検討から、アタッチメントスタイルによって、恋愛関係における時間的展望は過去に関しては差が見出されなかったが、現在に関しては安定・とらわれ型が他の型よりもポジティブな展望をもっており、未来に関しては安定型が他の型よりもポジティブな展望をもっていることがわかった。また、4つのアタッチメントスタイルにはそれぞれ差があり、ETPS-CRはアタッチメントスタイルを判別することができることを示された。

以上のことから本研究で作成したETPS-CRの因子構造、および構成概念妥当性が確認された。しかし、恋愛は相手が変わると関係が変わることから、過去の乖離は他者に対する親密性を回避すること、自分らしい生き方ができないこととは関連があったが、過去から現在と未来を予測することができないという結果が得られた。本研究においては過去は過去の（別の相手との）恋愛を尋ねる内容であったが、現在の相手との過去の関係を尋ねる内容にするなどの項目内要の検討が必要かもしれない。

### 引用文献

- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and Society*. W.W. Norton 仁科弥生訳 1977 『幼児期と社会』 み



- すず書房.
- Havighust, R.J. 1943 Human development and education. New York: Longmans, Green. (莊子 雅子訳 1958 人間の発達課題と教育 牧書店).
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10(1), 11-24.
- 片岡 祥 2008 青年期における恋愛関係の形成状態と捉え方形成過程の検討—アタッチメント理論をベースにした「現在」と「現在から過去」へのアプローチ 久留米大学大学院心理学研究科平成19年度修士論文
- 片岡 祥・園田直子 2007 愛着理論をベースに恋愛関係の形成過程を測定する尺度作成の試み—PRASS (Process of Romantic Attachment Status Scale) の作成と信頼性・妥当性の検討—第68回九州心理学会大会発表原稿集, ポスター発表
- Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 松井 豊・木賊知美・立澤晴美・大久保宏美・大前晴美・岡村美樹・米田佳美 1990 青年の恋愛に関する測定尺度の構成 東京都立立川短期大学紀要, 23, 13-23.
- 中尾達馬・加藤和生 2004 成人愛着スタイル尺度(ECR)の日本語版作成の試み 心理学研究, 75(2), 154-159.
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 谷 冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造: 多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成教育心理学研究, 49(3), 265-273.
- 都筑 学 1999 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版会
- 都筑 学 2007 大学生の進路選択と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討— ナカニシヤ出版

## Time perspectives in close relationships : Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships

NAOKO SONODA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

SHO KATAOKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

### Abstract

The purpose of this study was to construct Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships (ETPS-CR), which was based upon Shirai's Experimental Time Perspective Scale (1994). Shirai has found four factors out of his scale; "acceptance of the past", "fullness of the present", "goal orientation", and "hope". We conducted exploratory factor analysis on our scale and found five factors; "estrangement of the past", "weariness of the present", "fullness of the present", "future goal", and "hope".

Concurrent validity of the scale was examined by the correlation with four scales (PRASS, ECR, TLS, LETS-2), all of which measure the types of close relationships, and MEIS (Multidimensional Ego Identity Scale). The correlations showed meaningful patterns for concurrent validity. In addition, the scores of each factor were significantly different in those groups of four attachment styles. The result showed that the discriminant validity of the ETPS-CR was confirmed.

**Key words:** close relationship, time perspective, ego-identity, attachment styles

—関係版時間的展望体験尺度 (Experimental Time Perspective Scale in Close Relationships: ETPS-CR) の作成—  
展望のある関係・ない関係